

第44回中学生人権作文コンテスト

兵庫県大会

最優秀賞

私にできること

明石市立朝霧中学校 1年 田口 愛織

思いは、自ら行動を起こすことで形になる。今年の夏休み、私はそんな経験をしました。

今年も猛暑で、外出中体調不良になる人が多い中、インターネットでこんな記事を読みました。熱中症で病院に救急搬送された方が、回復して自宅に帰る前に荷物を確認すると、お財布もスマホもきちんとそのまま入っている上に、身に覚えのないペットボトル飲料や、塩分タブレットなどが増えていたという記事です。看護師さんによると、これは「熱中症あるある」だそうで、助けてくれた周りの方たちが持たせてくれた物なのだそうです。何一つ盗まれることなく、温かく親切な方の多い日本を誇りに思いました。そんな国に住む中学生の私も、困っている人の役に立ちたいと思いました。

ある日のこと、ふと家の窓から外を見ると、私の家の花壇に知らないおばあさんが腰掛けていました。両親が、

「お水を持って行ったほうがいいかな。」

と、話していました。おばあさんは体の具合が良くないのかもしれないと、私も心配になりました。しばらくすると、おばあさんはいなくなっていました。

「きちんと座れるベンチのようなものを作ろうか。」

と父が言いました。私の家は、急な坂道の一番下にあり、以前も知らないおじいさんが座っていたことがありました。これから坂を上らなければいけない人が、ちょうど腰を下ろすのに良い高さの花壇に少し座って、休憩しているのかもしれない。

夏休み、私は花壇に、高齢者の方に気がねなくひと休みしてもらえるスペースをつくろうと思いました。狭くて椅子やベンチを置くのは難しいので、良い方法がないか家族で考えました。椅子の足を外して座面だけ置いてみる、すのこを置いて座布団を乗せてみるなど色々と案が出ましたが、安全面や雨天のことを考えると、現実的ではない気がしました。

そんな時、インターネットで、福岡県のある町の「高齢者のイス」という取り組みの新聞記事を見つけました。その町は高齢化が進み、坂が多く買い物などが大変とのことで、私の住む町に似ていると思いました。その町も、高齢者の方が

少し休めるベンチや椅子を設置したいと考えたそうですが、設置できる場所は限られていたそうです。そこで区長さんが、地区を回って、花壇や外壁の出っ張りなど、腰掛けられそうな場所を探して、一軒一軒住民に「高齢者のイス」と書いたプレート設置の協力を依頼したそうです。ほとんどの家が承諾してくれたそうで、高齢者のイスは五十ヶ所にまで増えたそうです。

私はこれだ！と思い、力がわいてくるのを感じました。まず、花壇からはみ出して伸びている植物を整理して、縁が見えるようにしました。次に、木の板にペンキを塗って「高齢者のイス、段差をご利用ください」と書いてその側にかけました。それからというもの、家にいる時は、窓から時々花壇の様子を気にかけるようになりました。

買い物などの行き帰りに、何ヶ所か休める場所があれば、家にこもりがちな高齢者の方も外に出てみようという気持ちになるかな、外に出れば人と会話もできて気持ちも明るくなるかもしれない。これから地域にも高齢者のイスが増えていけば良いなと思いました。

そして思い切ってその思いを地域の役員さんに伝えてみることにしました。役員さんは、

「良い案ですね、高齢者のことを気づかってくれてありがとうございます」
とおっしゃって、今度の役員会議で自分でお話ししてみませんかと提案してくれました。

役員会議の日、私は制服を着て、緊張しながら会場の小学校に向かいました。大勢の大人が集まる中で、中学生の私が自分の考えを伝えるのは難しいかもしれないと少し怖かったのですが、役員さんが前もって資料を作成してくださっていたおかげで、スムーズに内容をお伝えすることができました。皆様に興味をもっていただき、とても良い考えだと温かい拍手までいただきました。そして実現に向けて、予算の確保や回覧板でのお知らせなど、協力をいただけることになりました。勇気を出して自ら行動を起こすことで、たくさんの方の力が集まったのです。

私の通学路には、高齢のスクールガードさんがたくさんおられて、幼稚園の頃から「いってらっしゃい」「おかえり」と、毎日明るく声をかけて見守ってくれています。今まではお世話になるばかりでしたが、中学生になったこれからは、恩返しもしていきたいです。

私一人の小さな思いも、行動を起こし、周りの方と力を合わせることで、形にできる。そう確信できた夏休みでした。これから私の住む町はもっとみんなにやさしい町になる。私は今、とてもワクワクしています。